

# シンポジウム 1

## 補完代替医療の評価としてのQOL



萬代 隆

国立循環器病センター

私は補完代替医療の専門家ではありませんが、Quality of Life (QOL) 評価研究の経験から、補完代替医療の有用性評価の方法論としてのQOL評価法の可能性に関し、何らかのお役に立ちましたら幸いです。

21世紀はQOLの世紀であると私は確信しています。QOLには広範かつ深遠な内容が包含されており、「生活の質」「生命の質」など多くの日本語訳がなされておりますが完璧な日本語訳は未完成であります。私は、QOLはそのままQOLと表現するのが適切であり、内容的には「人生に対する価値観」などが適合すると考えています。

QOL評価が有用な場面は、①比較したい治療方法間の有効性に差異が少ない場合、②治療が死亡率に対しては高い効果が得られても同時に毒性もかなり認められ、悪影響が多く存在する場合、③治療が長期に亘るが疾患の合併症の率も低く、患者が無症状かごく軽度の症状である場合、④ターミナルの患者の治療及びケア、⑤健常人の健康増進および一次予防、⑥障害者のノーマライゼーションの6場面であります。現時点で補完代替医療に関するQOLの視点からの位置づけは、上記の各領域に広く関係する可能性が推測されますが、今後の研究の進展の中でその位置づけが明瞭になると考えられます。

QOL研究の問題点は、QOL評価質問表の作成や学問的検討に関するハード面と、実際の調査実施・運用に関するソフト面に分類され、前者・後者ともさらに4要因に分類されます。前者の第1は疾患特異的・段階特異的なQOL評価質問表の開発であり、第2は国際共同研究や国際比較のための社会文化的価値観の差異の処理方法の検討です。さらに第3はQOL評価質問表作成時の妥当性の検討方法の改良であり、第4はQOL領域に関心を持つ異なる専門領域の研究者間（例えば医療領域専門家・保健領域専門家・福祉領域専門家・統計学者間など）での議論をさらに深める必要性であります。次に後者においては、①患者本人・医師・家族など第三者の誰がQOLを評価するのか、②QOL評価の時期の問題、③比較対照群設定方法、及び④欠損値処理法等の検討課題であります。

自然科学的アプローチが急速に発展を遂げた20世紀の医療において、臓器や疾患別の細分化された研究の進展の中に、満足感や充実感などの人間の内面的・質的な価値の重要性や多様な価値観も含めた、人間を全体として総合的に理解することの欠落が臨床現場で心配されています。サイエンスの占める割合が大きくなりすぎ、アートの領域がとかく軽視されがちな近代医療において、補完代替医療には科学的な基礎の上に人間的な魂を入魂した、21世紀の理想の医学としての存在が求められていると考えられます。

主観的で数値に置き換え表現することが困難である質的要素を数量化し、統計学的解析方法を用い

て客観的に評価することは、QOL研究の基本的な難しさであります。全く同様に、補完代替医療の有用性を科学的な基礎に基づくEBMを根拠として理解・表現することには、QOLの理論・実践における重要な課題と非常に近似した問題が存在すると予想されます。直接的な補完代替医療の有用性に関する検討結果はお示しできないかも知れませんが、今回これまで20年間のQOL評価の経験から、我々QOL研究会として取り組んだ補完代替医療に共通点が多く存在すると考えられる検討結果の紹介と、それら研究の基礎としてのQOL評価質問表開発の我々独自の、基礎的・臨床的な歩みの歴史を紹介させていただきます。

基礎的な手順やステップを省略することなく、是非とも補完代替医療の有用性を科学的根拠に基づいた方法論により説明し、広く全世界の病める人々への福音として、今後の貴学会の活動に少しでも参考となりましたら幸いです。